

防災と環境保全の両面から「いのちを守る森づくり」を展開している毎日新聞社の「つながる森プロジェクト」は、昨年度に続き今年度も「いのちの森づくりリレー植樹」を実施する。東日本大震災をきっかけに、改めて見直された「森の力」をテーマに据え、全国10カ所で植樹する予定。植樹に使う移植ごてをバトン代わりに各植樹祭をつなぐ一方、被災地と各植樹地との交流も目指す。【山本哲】

プロジェクトは「ふるさとの木によるふるさとの森づくり」を提唱する宮脇昭・横浜国立大名義教授の指導を受けて進めており、今年度は7年目。昨年度から始めたリレー植樹を継続する。

今年度のテーマは「森の力」。森林による津波の減衰効果など森そのものの力だけではなく、植樹や森づくりが地域の絆の強化や、人々の連携に結びつくという「森づくりの力」の意味も含めている。

植樹祭は、震災の地震による落石で一時入山が制限された茨城県つくば市の筑波山で6月に実施し、リレー植樹をスタートさせる。原発事故で避難した住民の帰村を宣言した福島県川内村で9月に再び開催する予定だ。

このほか、砂漠化した海岸線を60年に及ぶマツ主体の国の緑化事業で森林を再生し、コンパも回復した北海道・襟裳岬（えりも町）の百人浜で、来年の緑化60

年記念のプレ植樹として、漁師や小学生らを中心に10月、本来の郷土樹種であるカシワなどの広葉樹を植える。

津波の塩害で大量に枯れた宮城県南三陸町のスキの伐採跡地で、森林組合と連携して植樹祭を10月に開催するとともに、使い道のない伐採木を有効活用してリレー植樹の各会場に立てる植樹記念の看板を製作、被災地支援の一助にする。使い継いだ移植ごては来春、アフリカのケニアでの植樹に役立てられる。

また、植樹に合わせて、「日本の森林いまむかし」写真展を、「緑の募金」で知られる公益社団法人・国土緑化推進機構と共催で開催。はげ山だったところ、緑化された現在の山の写真を比較できるようにパネル展示する。かつて日本の主要な山の多くが森林の皆伐で荒廃し、災害も頻発していたことを知ってもらい、森づくりの重要性を理解してもらう。

## 「森の力」をテーマに

いのちの森づくりリレー植樹開催予定一覧



被災地の福島・川内村  
宮城・南三陸町などで



苗木の植え方を説明する宮脇昭・横浜国立大名義教授  
＝熊本県水俣市での植樹祭で昨年11月、いずれも山本撮影

昨年度は4300人が参加 2万4800本植える

リレー植樹は国連が定めた「国際森林年」だった昨年度、初めて開催された。移植ごてをリレーする形で全国12カ所で実施した。計4300人が参加して、計2万4800本を植えた。このうち、東日本大震災で津波の被害を受けた仙台市若林区では昨年7月に植樹を実施、各地に避難中の住民約3500人が集まり、海岸近くにある「海岸公園冒険広場」の一角に広葉樹1000本を植えた。宮脇さんの「森の防波堤」構想の最初の実施例になった。

9月には当時、原発事故の避難準備区域に指定された福島県川内村で植樹した。昨年は44人が犠牲になった大分県大分市から20年たった大分県大分市に当たる年だった。火山灰が積もった荒れ地に、緑をよみがえらせる取り組みで、林野庁九州森林管理局などと共催した。

4月の静岡県掛川市での植樹では、障がいを持つ子どもが参加、5月の東京都豊島区での植樹には大正大学の学生が協力するなど、若い世代が木を植える楽しさを体験した。

参加者が名前を書き足して各地を回った移植ごて約400本はケニアに送られ、今年4月26日にナクル湖国立公園近くで行われた宮脇さん指導の植樹で活用された。



稲雲の中、襟裳岬の植樹予定地で現地調査する宮脇さんら関係者たち＝北海道えりも町で今年2月14日

全国10カ所で「リレー植樹」